

比 恵 遺 跡 群 (18)

——比恵遺跡群第52次発掘調査報告——

福岡市埋蔵文化財調査報告書第404集

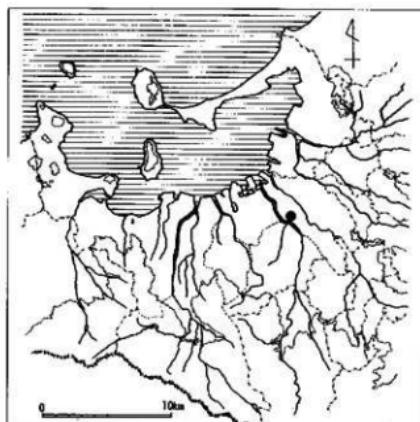
1995

福岡市教育委員会

比恵遺跡群(18)

——比恵遺跡群第52次発掘調査報告——

福岡市埋蔵文化財調査報告書第404集



遺跡略号 H I E - 52

遺跡調査番号 9 3 6 1

1995

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には多くの文化財が残されています。本市では文化財の保護、活用に努めていますが、各種の開発によってやむを得ず失われる埋蔵文化財については、記録保存のための発掘調査を行っています。

今回調査を行った比恵遺跡第52次調査は、共同住宅建設に先立って行われたもので、弥生時代から平安時代にわたる遺構、遺物が見つかりました。

本書が文化財の認識と理解、更には学術研究に役立てば幸いに思います。

最後になりましたが、発掘調査から整理、報告にいたるまでご理解とご協力をいただいた国鉄清算事業団を始めとする多くの方々に深く感謝する次第です。

平成7年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花 剛

例　　言

1. 本書は共同住宅建設に先立って、福岡市教育委員会が1994年3月1日～3月19日にかけて行なった比恵遺跡群第52次調査の報告書である。
2. 検出した遺構については、調査時には遺構を示す記号Mを付して検出順に通し番号を付した。本書では、この番号からMを除き、遺構の性格を示す用語を付して、溝1、土塁2のように記述する。
3. 本書で使用する方位は磁北である。
4. 本書で使用した遺構実測図は宮井善朗、服部寛子、平田こずえ、今泉博子が作成した。製図は宮井の他林由紀子の協力を得た。
5. 本書で使用した遺物の実測図は宮井の他東哲志が作成した。また製図は宮井、東の他林由紀子の協力を得た。
6. 本書使用の写真は宮井が撮影したものである。
7. 遺物実測図の()内の番号は、収蔵の際の登録番号である。本調査中に関わる記録、遺物類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵、管理されるので、活用されたい。
8. 本書の執筆、編集は宮井が行なった。

本文目次

I.はじめに	1
1. 調査の経緯	1
2. 調査体制	1
II. 比恵遺跡群の概要	3
III. 調査の記録	5
1. 概要	5
2. 検出遺構	5
3. 包含層出土の遺物	8
4. 小結	12

挿図目次

Fig. 1 比恵遺跡周辺の遺跡 (1 : 25000)	2
Fig. 2 今回調査地点と周辺の既調査地点 (1 : 4000)	4
Fig. 3 調査区位置図 (1 : 500)	6
Fig. 4 土壌2実測図 (1 : 20)	7
Fig. 5 土壌2出土遺物実測図 (1 : 3、1 : 2)	7
Fig. 6 溝1出土遺物、包含層出土遺物1 (1 : 4)	9
Fig. 7 包含層出土遺物2 (1 : 4)	10
Fig. 8 包含層出土遺物3 (1 : 2、1 : 4)	11

図版目次

PL. 1 (1) 調査区全景 (北から)	
(2) 包含層下面遺構 (西北から)	
PL. 2 (1) 土壌 (南から)	
(2) 遺物出土状況	
PL. 3 (1) 土壌14 (西から)	
(2) 土壌17 (東から)	
PL. 3 出土遺物	

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

1993年、国鉄清算事業団より、共同住宅建設予定地内における埋蔵文化財の有無についての事前審査願いが出された。申請地は比恵遺跡群に隣接しており、埋蔵文化財課では審査願いを受けて8月18日～27日にかけて試掘調査を行なった。その結果申請地内には溝などの造構と共に、黒色土中より多量の遺物が出土した。この成果をもとに協議を行ない、工事によってやむを得ず破壊される部分については発掘調査を行ない、記録保存を図ることになった。発掘調査は、国鉄清算事業団との委託契約により、福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行なうこととなり、1994年3月1口に着手し、3月19日に終了した。

2. 調査体制

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉（前） 尾花 剛（現）

調査総括 埋蔵文化財課 課長 折尾学 第2係長 山崎純男

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 入江幸男

調査担当 埋蔵文化財課第2係 宮井善朗

調査作業 中川敏男 野村道夫 相良謙一 三浦力 太田正顕 平田穂積 川島健治 田原房五郎

川上すぎえ 舎川キチエ 村田トヨ子 山村スミ子 松岡芳江 鍋山治子 坂口加代子

大石紀子 秋丸亜佐子 佐藤志津

調査補助 服部寛子（九州大学）平田こづえ、今泉博子（別府大学）

整理補助 東哲志（福岡大学）

整理作業 大石加代子 林由紀子 堂園晴美 太田順子 秋丸亜佐子 谷口美由紀 水町志保

森田めぐみ 西岡由美子

また調査時には福岡市教育委員会の山崎純男氏、井澤洋一氏をはじめとする先輩、同僚諸氏から多くの助言をいただいた。深く感謝すると共に、本報告書に十分活かしきれなかったことをお詫びしたい。

遺跡調査番号	9361	遺跡略号	HIE-52
調査地地番	福岡市博多区博多駅南5丁目-139		
開発面積	2809m ²	調査対象面積	1100m ²
調査期間	1994年3月1日～3月19日	分布地図番号	37-A-1



Fig. 1 比恵遺跡周辺の遺跡

II. 比恵遺跡群の概要

比恵遺跡群は福岡平野のほぼ中央に位置する。福岡平野には御笠川、那珂川の二つの河川が南から北へ貫流している。この両河川は比恵遺跡及びその南側に位置する那珂遺跡付近で最も接近し、それからほぼ平行して博多湾に注ぐ。両河川の間には南から春日丘陵、板付台地、那珂、比恵の台地などの丘陵、台地群が伸びている。丘陵、台地内にはまた小規模な谷が多く入り込み、複雑な地形を呈している。この丘陵、台地の上や沖積地内の微高地などには、とくに弥生時代以後を中心として各時代にわたって多くの遺跡が発見されている。比恵遺跡はその内の一つで、春日丘陵から北へ派生して来る台地の最北端に立地する。比恵遺跡群は北側は台地の先端と共に沖積地に没する。この沖積地は博多湾岸に発達する砂丘の後背湿地である。その砂丘上には弥生時代に始まり、古代、中世に最盛期を迎える博多遺跡群がある。南側は浅い谷を隔てて那珂遺跡群と接する。

比恵遺跡群の調査は早く、1938年の鏡山猛によるものを嚆矢とする。戦後には1950年代の森貞次郎の調査などがあるが、1980年代以後、開発の増加と、文化財にかかる組織の整備とが相俟って調査が急増する。1995年3月現在で、調査次数は55を数える。

比恵遺跡群における遺構遺物の確認は旧石器時代に遡る。量的には少ないが、ナイフ形石器が出土している。縄文時代の遺物、遺構は極めて僅少である。縄文時代晩期末～弥生時代前期にいたって遺構、遺物とも急増する。該期の遺物は台地北側、西側の縁辺部に多く分布する。今回調査地点のすぐ東側の3次調査地点でも突唇文土器がまとまって出土している。また台地北側の調査地点では、堅穴式住居、貯蔵穴、木器貯蔵穴などの遺構が多く検出されており、このうち木器貯蔵穴からは、木製の農具、工具、容器等の他、土器調整用の工具（ハケメ原体）、剣形木製品、儀杖等も出土している。弥生時代中期には遺跡全域に拡大する。遺跡のほぼ中央部には甕棺墓地が造営され、細形銅劍を副葬する甕棺墓もある。この甕棺墓を中心とする一角は、墳丘墓の可能性も指摘されている。また集落の住居の中には直径12mを測るような大型の円形住居が現れる。中期から後期にかけては堅穴式住居のほか溝、井戸、掘立柱建物等が各所で検出されている。また後期の溝の中には集落を開む環濠と考えられるものや、方形区画をなすものが検出されている。とくに井戸からは多量の土器、木器が出土することが多い。木器の中には櫛子の実製の容器、朱彩を施したさしば（？）等注目される遺物もある。青銅器の鋳型も武器形祭器を主として多く見つかっているが、生活遺構から破片で出土している例がほとんどである。しかし博多駅南4丁目における第40次、42次調査では、鋳型と共に取瓶が出土し、比恵遺跡群内でも青銅器製作が行われていた可能性が極めて高いことが判明している。

古墳時代にはいとも引き続き集落が営まれるが、比恵遺跡群内では前方後円墳をはじめ古墳は確認されていない。ただ博多駅南6丁目の31次調査では古墳時代前期初頭の方形周溝墓が検出されている。古墳時代中期の生活遺構は少ないが、後期にはいると再び住居跡などが増加する。古墳時代後期では、今回調査地点の東側の8次調査、博多駅南4丁目の31次調査、7次、13次調査、50次調査で、大型の掘立柱建物群が見つかっている。建物群には柵列や、溝が伴っている。同様の遺構は南側の那珂遺跡でも見つかっている。時期的には初現が6世紀後半頃、終末が7世紀代に収まるものと見られている。整然とした配列は官衙を思わせるものがあり、日本書紀宣化元年（536）条に見える「那津官家」との関連が考えられている。

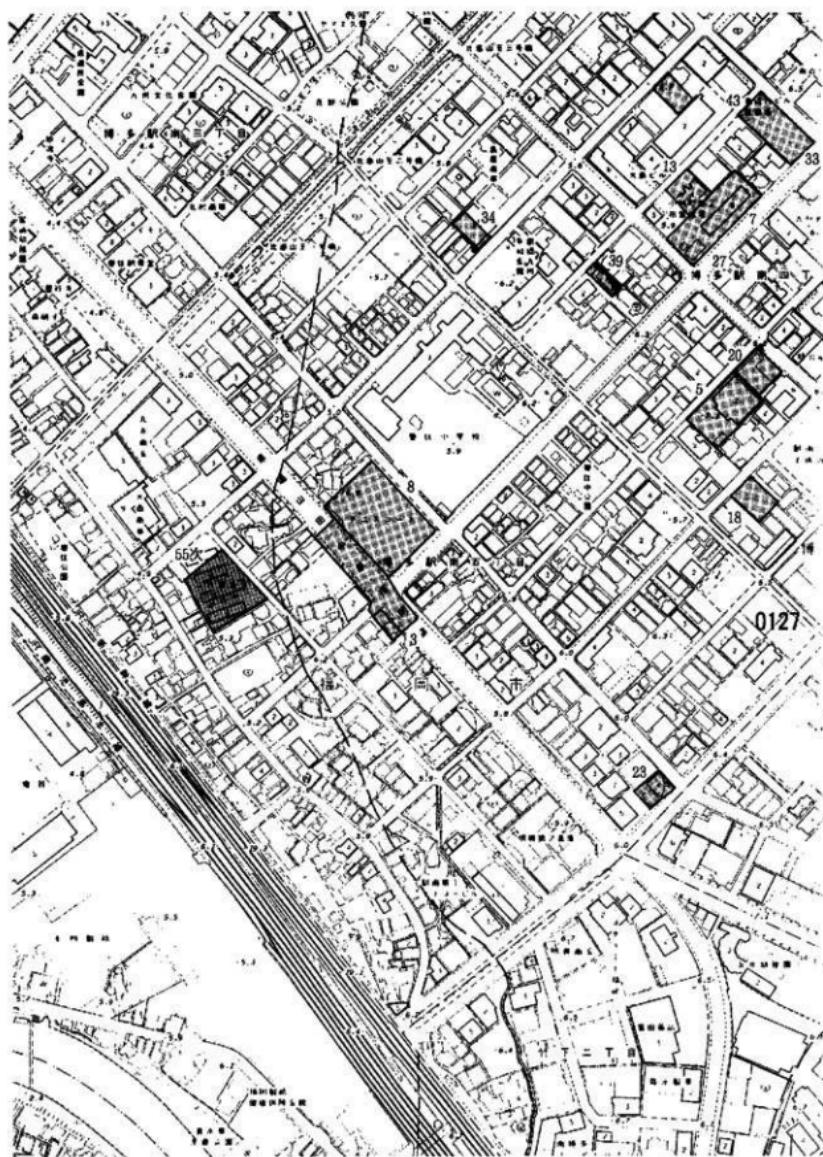


Fig. 2 今回調査地点と周辺の既調査地点 (1:4000)

III. 調査の記録

1. 調査の概要

今回調査では黒色土からなる遺物包含層、包含層の上面から掘り込まれる溝1条、包含層除去後の鳥栖ローム層、八女粘土層上面で検出した土壤、ピットなどが調査の対象となった。調査が進むにつれて、包含層上面では溝1の他に遺構は検出されず、包含層下面の地山上の遺構も大多数が浅い凹みで、人為的な掘削と考えられる遺構は少なかった。また包含層中の遺物がかなり多量であり、調査の主眼をこの遺物の回収に置かざるを得なかった。年度末の調査という時期的な制約も強く、確実な遺構と見られる土壤2のみを縮尺1/20で実測し、その他は縮尺1/50で平板測量を行なうこととした。

包含層は弥生土器が最も多く、若干の須恵器、土師器を含む。しかし層位的には全く別れず、黒色土中に混在するような状況であった。従ってかなり後世になって台地上の遺構が濃密な地区から土取りをして持ち込まれたのではないかと考えた。これについては整理時の溝1出土遺物の再検討から、溝1が古代まで瀕死の可能性が高くなつたため、包含層形成時期の下限を該期に考えた方が適切であろう。

2. 検出遺構

検出遺構のうち主なものについて述べる。

溝1（付図）

調査区をほぼ南北に貫く溝である。覆土は砂である。調査区内での延長は32mほどを測る。幅は1.5~2mほどである。試掘時は古代の溝と見られていたが、調査時には出土遺物がほとんど弥生土器で包含層から洗いだされたものと考えた。また包含層が前述のような状況であったため、中世ないしは近世に近い時期のものではないかと考えた。しかし覆土中の最も新しい遺物は図示したような土師器、内黒土師器、ヘラ切りによる土師皿などであり、該期の遺物は包含層にもごくわずかに含まれる。従って、掘削時期が古代後期に瀕死の可能性は高いといわざるを得ない。

出土遺物（Fig. 5）1は須恵器の壺である。2は土師皿である。磨滅が著しいが底部はヘラ切りと思われる。口径10.8cmを測る。3は灰白色を呈する土師質の土器であるが、焼成が堅緻で瓦質に近い。このような土器については井澤洋一氏より黒色土器の表面が磨滅し、付着した炭素分が除去されたものであるとの教示を得た。端反りの口縁部を持つ。4は3と同様の灰白色を呈する瓦質に近い焼成の碗である。これも黒色土器の磨滅したものと思われる。高台は高い。5は内黒土師器である。やや高く踏張り気味の高台がつく。これらの土器群は、1の須恵器がやや瀕死の可能性があるが、概ね10世紀末から11世紀前半に属するものとされよう。

土壙2（Fig. 4）

調査区南東端で検出した。一部を検出したのみでほとんどが調査区外にでるが、円形ないし梢円形に復元されよう。深さは30cmほどである。遺物は覆土中から散漫に出上している。弥生時代中期前半頃の貯蔵穴ではないかと考えられる。

出土遺物（Fig. 5）1は弥生土器の壺底部である。安定した平底を呈する。外面はハケメを施す。2は同じく弥生土器の壺口縁部である。口縁部は短く外側へ張り出す動き先状を呈する。胸部はほとんど張らない。外面は縦方向のハケメを施す。3は石包丁の破片である。基部を直線的に作る。4は砥石と思われる。研磨は全面に及び、全面を砥面としているようである。

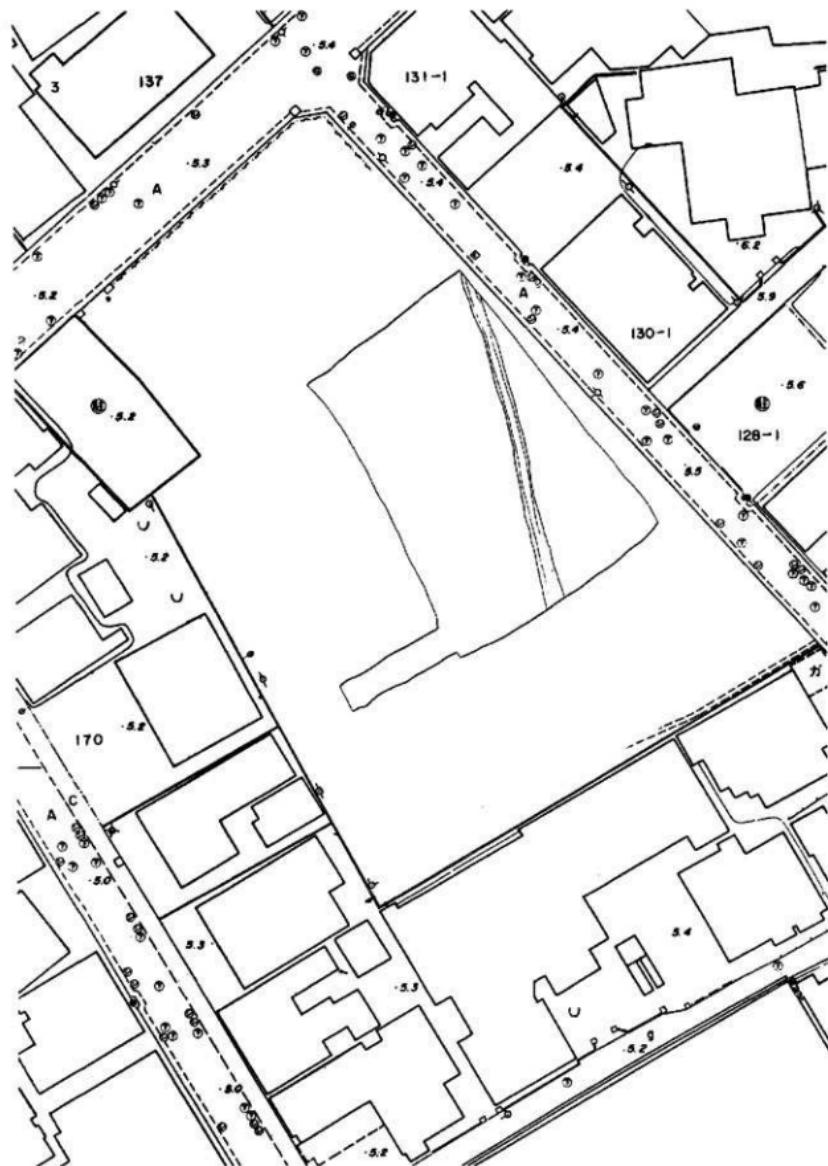


Fig. 3 調査区位置図 (1:500)

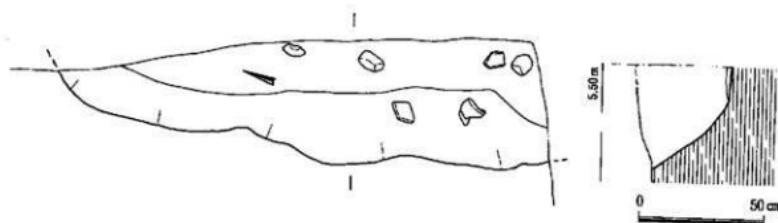


Fig. 4 土壙2 実測図 (1 : 20)

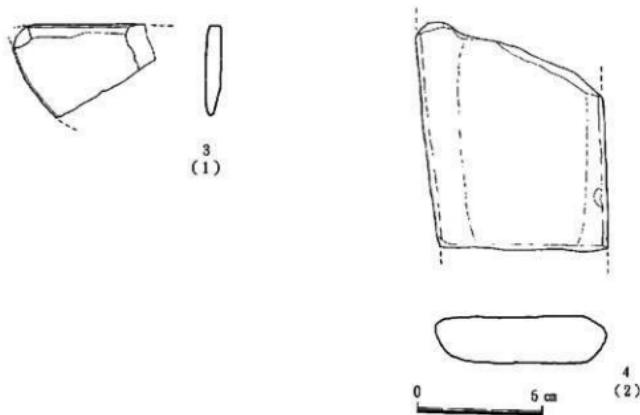
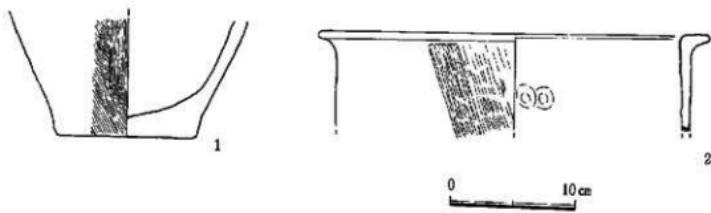


Fig. 5 土壙2 出土遺物 (1 : 3, 1 : 2)

3. 包含層出土の遺物 (Fig. 6~8)

包含層出土の遺物は総量20箱程度が出土している。出土遺物には土器、石器、土製品、瓦などがあり、時期的には刻目突帯文土器から古代に及ぶが、量的には弥生時代のものが最も多く、古墳時代以降のものは少ない。前述したように各時代の遺物が混在しているような状況なので、比恵遺跡群内で多量に見られる器形については遺存の良好なもの数点で代表させ、特徴的な器形のものを多く図化するに努めた。

6は刻目突帯文土器の壺である。胴部で屈曲し、屈曲部と口縁部に突帯を巡らす。口縁部突帯は口縁部の上端に一致する。刻目はヘラ状工具により、比較的小振りで密である。外面には条痕を施し、内面は条痕の跡なで消している。この遺物は土壤18とした造構から出土しているが、この造構は浅い凹み状を呈し、地山の凹みの一つであると考えられる。7も刻目突帯文土器の口縁部である。胴部で屈曲しない器形のものであろう。突帯は高く、刻目は深い。外面は擦過痕が見られる。

8は大形の甕形土器である。口縁端部内面に薄く粘土帯を貼付しわざかに肥厚させる。外端部は坦面をなし、上下端に刻目を施す。口縁部下に2条の沈線を施す。胴部内面にはハケメが見られる。9は壺の口縁部である。口縁部が厚手である。口縁部外端は広い坦面をなし、上下端に刻目を施す。口縁部下に断面三角の突帯を2条巡らす。10は如意状口縁部を持つ壺の口縁部片である。口縁部は強く外反する。下端部には細かな刻目を施す。口縁部下に細く高い突帯を1条巡らす。11も同様な壺で、11口縁部は坦面を持ち、下端部に刻目を施す。口縁部下に突帯を1条巡らせ、突帯にも刻目を持つ。12は円盤貼付の壺底部である。13は壺口縁部である。端部は屈曲して外反する。口縁部下に段を持つ。内外面ともミガキを施す。8~13は弥生時代前期後半に属する土器である。

14は鋸先口縁を持つ壺である。口縁部が外側へ屈曲する。内面には稜が立たない。胴部はほとんど張らないようである。15も外側へ屈曲する口縁部を持つ。内面の稜は甘い。胴部はわずかに張る。16は鋸先口縁で、口縁部は平坦である。14~16は弥生時代中期前半に属するものである。

Fig. 7~17は壺底部である。広い平底からわずかに外反しつつ立ち上がる。外面に丹塗とミガキの痕跡が残る。底部端にはハケメも認められる。弥生時代前期後半のものであろう。18は壺の底部で、やや狭い平底から大きく広がりつつ立ち上がる。外面には丹塗の痕跡が見られる。中期前半のものであろう。19~21は脚台状を呈する壺底部である。19、20の脚台は高く、わずかに外側へ踏張る。21は低く、大きく外側へ広がる。いずれも外面にハケメを施す。弥生時代中期初頭に属するものであろう。22は穿孔を施す壺底部である。厚い平底を呈し、焼成後に穿孔する。弥生時代中期前半に属するものであろう。

23は広口壺の口縁部である。口縁外端部は坦面をなす。頸部は余り反らず直線的に広がる。外面に丹塗の痕跡が認められる。中期前半に属するものであろう。24は短頸壺の口縁部である。直線的に広がる短い口縁部を持つ。肩部がかなり張るようである。内外面ともハケメを施す。25は複合口縁壺の口縁部である。屈曲部から上位は直線的に内傾する。口縁部は坦面をなす。24と25は弥生時代後期に属するものであろう。

26は土師器把手である。27は須恵器壺の口縁部である。端部は若干拡張して、垂直に坦面を作る。端部直下に断面三角形の突帯を1条巡らせる。突帯の下の頸部には波状文を施す。26、27は古墳時代後期のものである。

28は平瓦である。凸面は繩目叩きを施し、凹面には布目が残る。端部はケズリが認められる。29は高台付きの内黒土師器碗である。高台は高く、端部は丸みを持つ。これらの遺物は溝1とほぼ同時期が若干遅るものと思われ、この包含層の形成が、溝1の掘削を伴うなんらかの造成工事による整地に

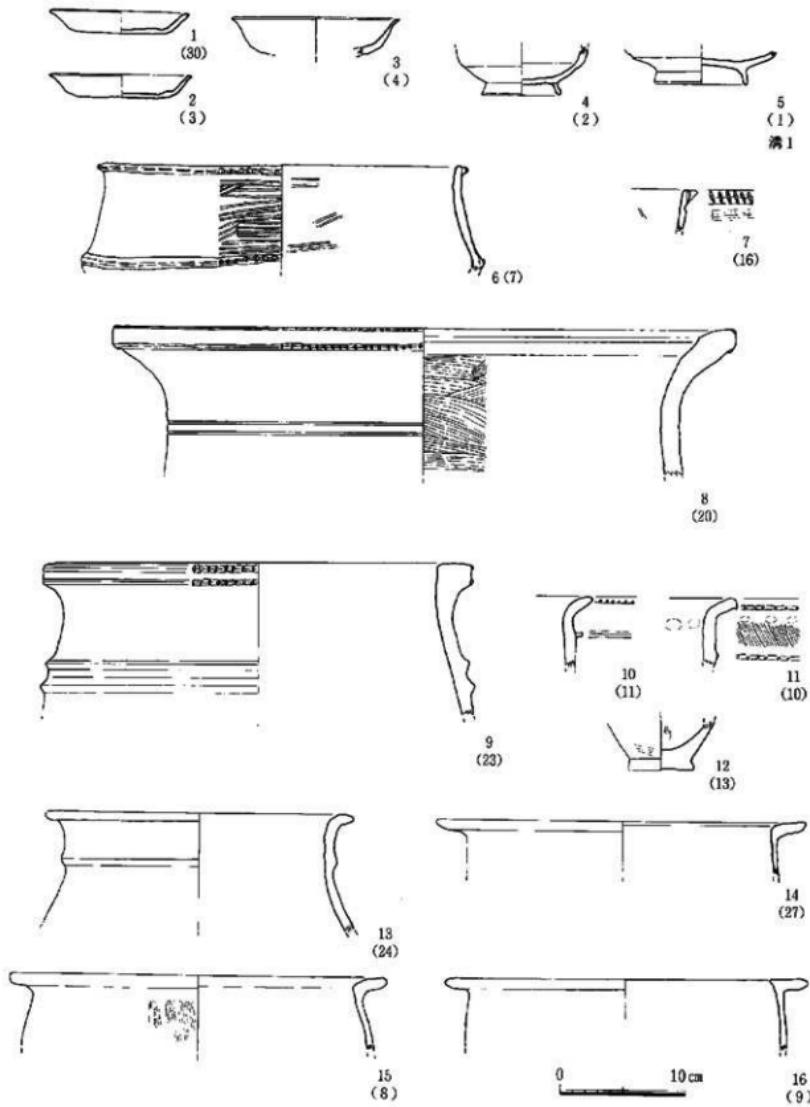


Fig. 6 溝1出土遺物、包含層出土遺物 1 (1 : 4)

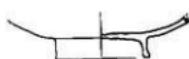
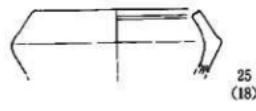
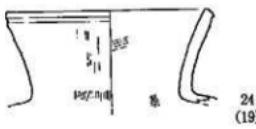
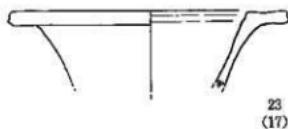
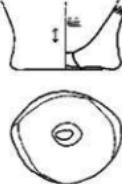
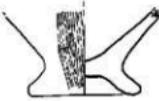
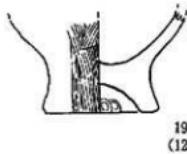
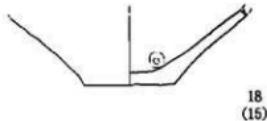
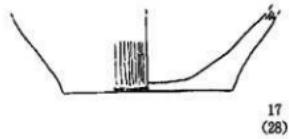


Fig. 7 包含腐殖上遗物 2

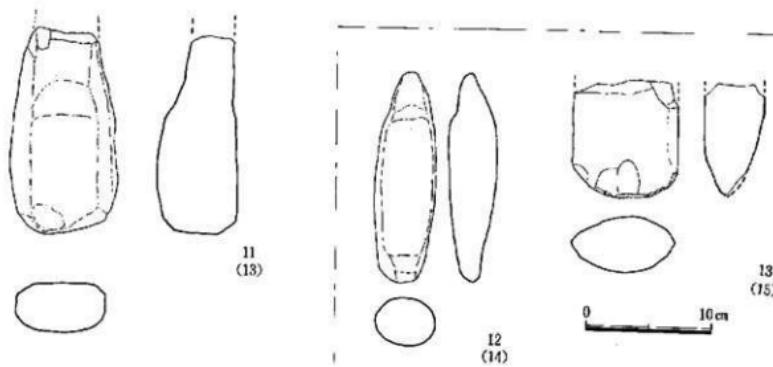
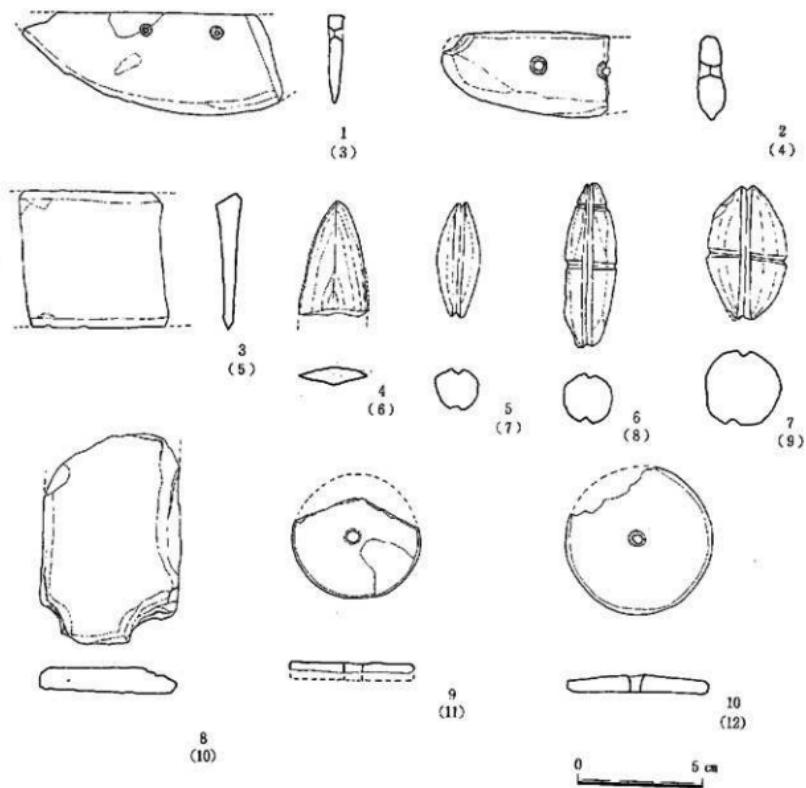


Fig. 8 包含層上遺物 3

伴うものであると考えられる。

30~32は土製の投弾である。いずれも長4cm、径2cmほどの杏仁型を呈する。

Fig. 8には出土石器の主なものを掲げた。1、2は石包丁である。1は基部を直線に作り、外湾刃である。暗灰色を呈する粘板岩質の石材である。2はやや細身のもので、側端部が丸みを持つ。風化のため灰白色を呈するが、1と似た石材である。3は石鎌の刃部片である。断面は鋭利な三角形を呈し、基部は明瞭な坦面を持つ。玄武岩質の石材を用いる。4は磨製石剣の峰部である。節理を利用して装飾的に仕上げているが、層状に剥離しかけている。5~7は石鍤である。5は滑石製である。紡錘形で縦方向のみに溝を刻む。6は砂岩製である。紡錘形を呈し、縦方向に1条、横方向は中位と上端部付近に2条の溝を刻む。7は杏仁形を呈する。滑石製で十文字状に溝を刻む。8は石剣の未製品の可能性があるものである。下端部に細かい剥離で茎を作りだしているようである。9、10は滑石製の紡錘車である。9はほぼ平坦な円盤状、10はやや中央が厚くなる。11、12は砥石の一種と考えられる。11はほぼ全面砥面と考えられるが、薄くなっている部分がとくに滑らかで、よく用いられていると考えられる。12も同様に先端部分が薄くなっているが、この部分が主に砥面とされたものと考えられる。13は玄武岩製の太形蛤刃石斧の刃部片であるが、刃部先端にも欠損が多い。

4. 小 結

比恵遺跡52次調査では古代後半期の整地層の可能性がある包含層、その上面に掘削された溝、包含層下面での弥生時代土壤などを検出した。比恵遺跡では6世紀後半頃大規模な倉庫群が建てられており、那津官家との関連が考えられているが、それ以後の時期になると大形建物の中心は那珂遺跡群に移り、比恵遺跡群では希薄になる。しかし、遺跡郡南端に近い駅南6丁目の16次調査では越州窯系青磁も出土しており、古代以後も中心的な集落の一つであった可能性は高い。また、今回の布目瓦の出土からも、瓦葺建物の存在が考えられる。古代以後の比恵遺跡についても、今後留意しつつ調査結果を蓄積していきたい。

また包含層内からは弥生時代を中心として多量の遺物の出土を見た。図化したものは一部であるが、とくに尖底文土器期から弥生時代前期にわたる上器が多量に出土した。この周囲では3次、8次調査で該期の遺物が出土しており、遺構の広がりを想定できよう。付図及び、図版に掲げた土壤14、17、50などは、土壤2と同じく人為的な掘削による貯蔵穴、貯木土壤など遺存の可能性を考えてよいかもしない。

図 版



(1) 調査区全景

(2) 包含層下面遺構



(1) 土壌 2 (南から)

(2) 遺物出土状況 (Fig. 6-6)

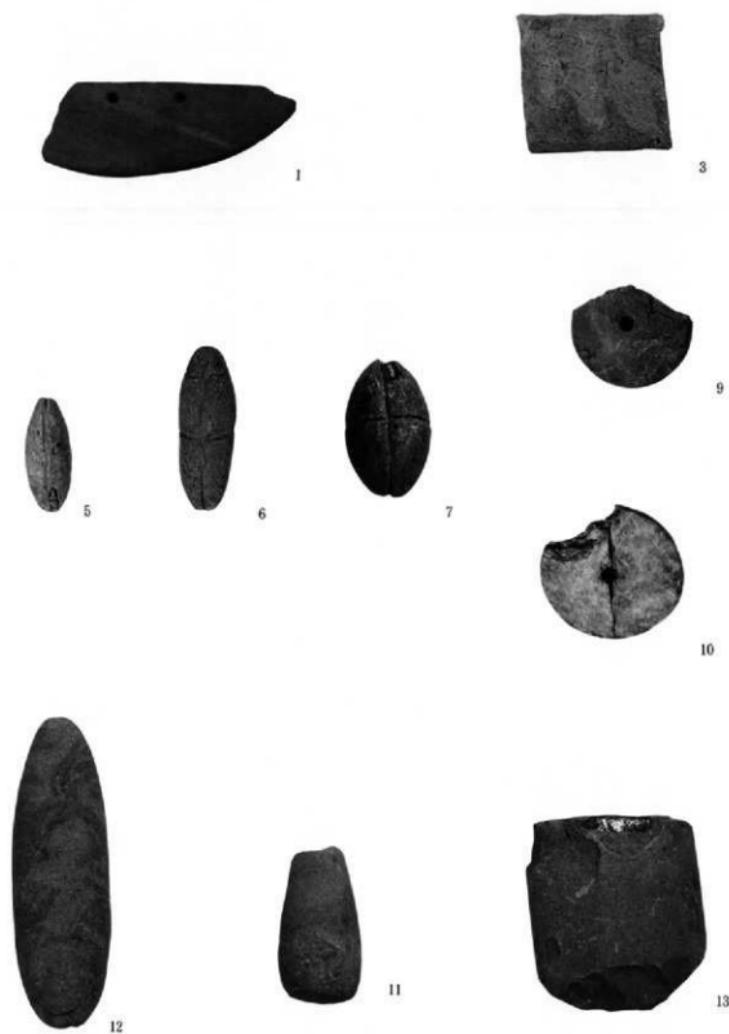
(1)



(2)



(1) 土壌 14 (西から) (2) 土壌 17 (東から)



出土遺物（番号は Fig. 8 に一致）

比恵遺跡群(18)
比恵遺跡群第52次調査報告

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第404集

1995年3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷 佛松古堂印刷

